

# 広池千九郎と最高道德の構造

— 人心開発救済論の視座から —

## 目次

- 一、最高道德の理想と体系
  - (一) 人類文化の課題と最高道德
  - (二) 価値、法則及び意味世界の開拓
- 二、価値理想論
  - (一) 幸福観——究極価値
  - (二) 品性完成と慈悲——根本価値
- 三、価値実現論
  - (一) 価値実現の順序
  - (二) 人心開発と救済の意味
  - (三) 価値伝達の方法
- 四、価値解釈論
  - (一) 真に救済された人とは
  - (二) 価値実現と人間的意味の完成
- 五、人類の新文明建設への福音

## 一、最高道德の理想と体系

(一) 人類文化の課題と最高道德

最高道德 (supreme morality) とは、広池千九郎 (法学博士、一八六六一—一九三八年) が「道德科学」(モラロジー) において明らかにした高次元の道德である。それは、広池が長年にわたり極度の困苦を越え、至誠一貫たゆまざる精進を重ねて発見した道德である。そしてまた、広池自身がその実行を積み重ね、同時に周囲の人々に

永安 幸正

も親しく実行を勧めてその有効であることを確かめ、全人類に対し、一層進化発展し、平和、幸福となつて欲しいとの悲願をこめて推奨した特別な徳徳である。それは、人類社会に「シヴィライゼーション (civilization) よりいま一步進んだ精神的文明」を造り出すことを目的とする徳徳である(『論文』⑥六―七ページ)。その学理と実践指針は『道徳科学の論文』(昭和三年初版)で体系的に示されている。以下においては、最高徳徳の体系の構造と特質を明らかにし、その現代的意義を考察する<sup>1)</sup>。

さて広池の最高徳徳論には、人類の文明・文化と、それを生み出した人間精神への深い反省が込められている。広池は、一面には「人間の文化」は漸次に進歩したけれども、「神的文化たる最高徳徳」が没却され今日ほとんど転覆に瀕していると見ていた。そして、「デモクラシー・社会主義・共産主義もしくは無政府主義など種々の思想」が案出されたものの、人類はなお不安不幸に陥りつつある、と時代の趨勢を展望していた(『論文』旧版⑥一八二五―二五ページ)。広池は遠く歴史を顧み、かつ広く世界を見渡すと共に、身近に人間という存在に深く思いを致し、また彼自身の深刻な人生体験からして、そのように考えたのである。

われわれの生きる現代は、人類にとって生の意味、「意味体系」(コスモス)にゆらぎを生み出している。現代の人々は「道徳的・精神的な中心感覚の方向喪失」(A・ゲレン)に陥っている。したがって個人的にも団体的にも人間としての生きる意味とその実現の方法、いかえると人間の「根柢」への問いに取り組みねばならない状況にある。その因つてきたる根源は深く、それゆえ問い直しも根源的でなければならぬのである。

ではこうした課題に答えようとする「最高徳徳」とは何か、その本質はいずこにあるのだろうか。それは、次のような徳徳であるとされる。

(イ) 最高徳徳とは「宇宙自然の法則」である。すなわち最高徳徳は「自然の法則及びこれに一致するところ

の人為の法則の全部」を意味し、その実質は「神の意志」(心)の表現としての自然の法則である(『論文』①第二緒言一〇九ページ、⑦一五ページ)。広池は言つ、

「モラロジ―における最高徳徳はその実質及び内容ともに宇宙自然の法則でありますので、その名を徳徳に藉つておりますれど、その実は宇宙及び人類進化のすべての法則であるのでござります。」(『選集』第一巻二七六ページ)。

すなわち法則とは、「客観的には大宇宙の全法則の体系、主観的には小宇宙である人間各自の精神的ならびに物質的生活の全部の法則」であり(『選集』第二巻四二八ページ)、自然界、社会、心身の法則すべてにわたる。

(ロ) 最高徳徳とは「世界諸聖人の知識と道徳」である。最高徳徳は人類の教師といふべき世界の諸聖人、すなわち孔子、シャカ、ソクラテス、イエスに一貫する道徳であり、日本では歴代の皇室を中心とする道徳系統に現れてきている道徳原理でもある。そもそも広池の最高徳徳論の着想は、日本皇室を中心に流れている道徳価値への着眼から出発している(『論文』①第二版序文九ページ)。しかし広池の最高徳徳論はそれにとどまらず、西欧世界の歴史家トインビー(イギリス)とか哲学者ヤスパース(ドイツ)などとおなじく文明論的な視野を持ち、人類の高等文明の源流に一貫する道徳の出会いと統合を意図するものである。すなわちそれは、中国文明における孔子の「仁愛」、インド・アジア文明におけるシャカの「慈悲」、ヨーロッパ文明におけるソクラテスの「正義」、及びイエスの「愛」(アガペー)、そして日本文明では古来の「清明真の心」(大和魂)の出会いである<sup>2)</sup>。そして広池によると、「真に人類の生存・発達・安心および幸福享受の原理に一致するところの学問・思想・道徳及び信仰はいわゆる諸聖人の実行されたところのもの」なのであり、それを「純粹正統の学問もしくは最高徳徳」と命名する(『論文』①第二緒言一一二ページ)。

このような高等諸文明の会合を視圈に収めて普遍的原理を志向することは、明治に始まる近代日本の歴史的な使命であった。それは日本として、いち早く古代中国文明とインド文明からの薫育を受けた大化改新の時代における第一の国際化につぐ、第二の国際化の課題であった。

(ハ) 最高道徳は「調和的全体的な効果」を生む道徳である。道徳は、従来のように「単に自己を損して他を益する」というとき浅薄な意味のものではなく、「自己」と相手方と第三者との全部に対して、その生存・発達・安心及び幸福を保障する」道徳、「三方よし」の道徳なのであり、それでこそ真に自己を益する道であるとされる(「論文」①第二緒言一〇九ページ)。

(ニ) 最高道徳は人類社会の進化を目指すすが、それは革命や制度の形式的変革を先行させるのではなく、まず社会の一人ひとりの構成員の精神の改革つまり「人心の開発救済」による。最高道徳の目的とするところは「人類の生存・発達・安心及び幸福の実現すなわち人類の最高文化の実現」にあり、その究極的方法は最高道徳による人間教育つまり人間の精神の開発救済の外はない。広池は、これこそ「個人としての人間及び人間社会に新たな創造的要素を注入してこれを進化させるに至るところの画期的文化事業」であると表明している(「論文」①第二緒言二〇一―二四ページ)。いわく、

「人間に対する創造及び進化は、人間の精神に対して人間の過去の経験の結果たる学問及び道徳に加うるに聖人の教説を注入し、もってこれを開発するにあるのです。……真に聖人の教説に基づきて忠誠且つ公平なる精神よりなすところの人心の開発は、これをなす人に、必ず真の安心と幸福とを生ずることは疑いなきことにて、私の二十年来親しく確実に経験するところであります。」(「論文」①第二緒言二〇一―二二ページ)

人間の行動の「原動力」はその精神作用にあり、したがって精神作用におけるこのような「根本的改心」こそが、今後の人類の新たな可能性を開く唯一の基礎である。すなわち「神の心に一致するところの人間の最高品性」を形造ることは、最高道徳を実行することによってのみ出来ることであり、「その実行の帰着点は人心の開発もしくは救済に力を尽くすにあるのです」といわれるのである(「論文」②二七六ページ)。

以上の意味から、広池のいう最高道徳は人類の知と生き方についての新生(ルネッサンス)と創造的革新(イノベーション)とを目標としたものといえる。すなわち、古代聖人の教えを再興するという点では「道徳の新生」(ルネッサンス)であり、またこれまでの普通一般の人間の生き方つまり従来の道徳に対比すれば、それを超えた新たな「価値実現」の原理の提唱であるから、「道徳の革新」(イノベーション)なのである。

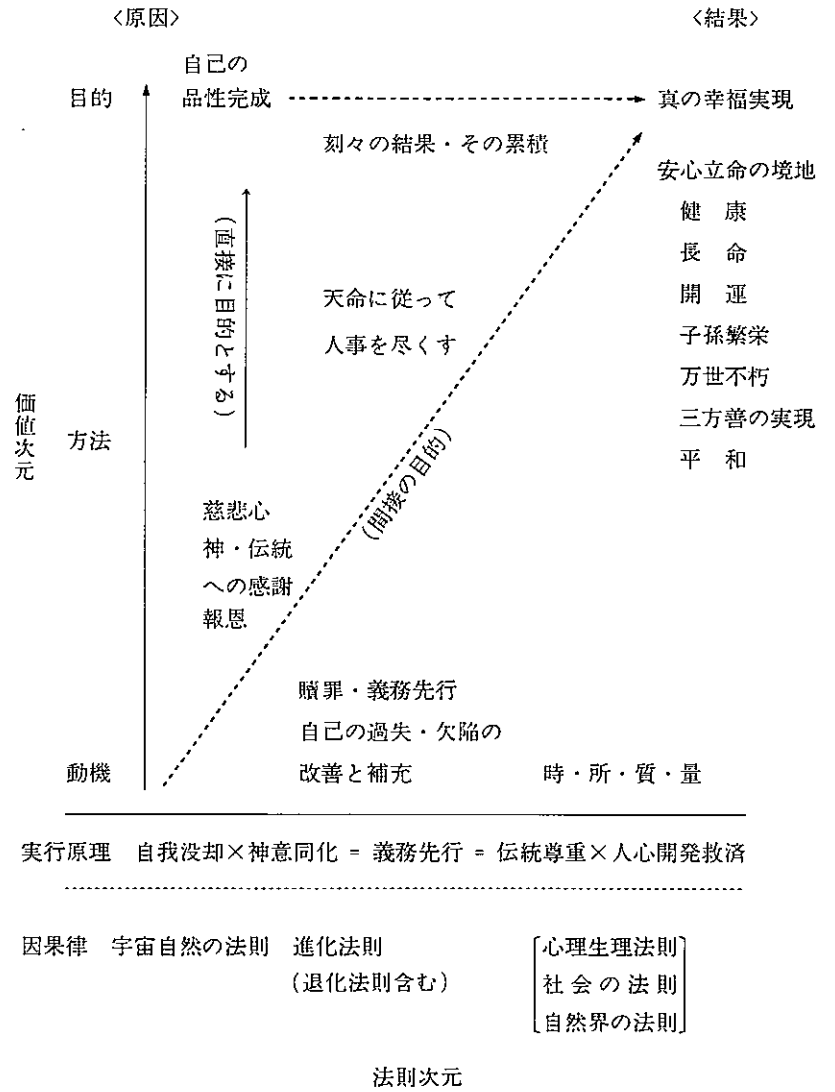
そこでこれから、広池の最高道徳論の全体的構造の核心を明らかにするために、「人心開発救済論」を中心に検討していきたい。人心開発救済論は最高道徳の総合であり極致であるからである。

## (二) 価値、法則及び意味世界の開拓

われわれ人間は何等かの価値理想すなわち「人生の意味」を求めて生きている。それは生き甲斐とか、自己実現とか、様々な表現を与えられるが、つまるところそれは人間の「幸福」とは何か、「救い」とは何かという問いである。それは人間の発達、進化的向上の理想と方法についての見方であり、人間発達論でもある。広池の最高道徳の提唱は、まさにそれに正面から取り組んで、人類に対する包括的な意味体系を開示するものである。

人間は「意味世界」(意味のコスモス)に住み、人間の生きる活動とは意味世界を開拓し進化させることだが、その場合、意味世界は価値と法則という二つの次元からなっていることに注目すべきである。すなわち一般論としていえば、「道徳」とは「価値と法則との統合としての意味体系」の実現なのであり、したがって道徳とは、し

第1図 最高道德の構造連関



ばしば法と対比されるような人間活動の内の特定の部分ではなく、人生の意味を開拓し進化させ完成する人間活動のすべてである(『論文』①九三ページ以下、『第一図』を参照されたい)。

(イ)さて、まず道德の「価値次元」とは、動機・目的・方法・結果の善し悪しである。つまり、人間として生きるために、どのような目的を目指すか、それはいかなる動機から出発し、いかなる方法を選択するかについての側面である。価値は人生の生き方における決断と選択にかかわる。

(ロ)また「法則次元」とは、「原因と結果とを結ぶ関係付け」の次元である。つまり原因とは右のような道德実行である。その道德実行が原因となり、どのような法則を経由してどのような結果を生み出すが問われるのである。

道德実行が法則の基礎を持たねばならぬことについては、「道德実行の効果の証明」が必要であるとの観点からして、次のようにも述べられている。

「元来、道德の本義からいえば、道德は自己が神に対し社会に対し行うべきものであって、その効果の利・不利は問うべきはずでないが、しかしこれを行うても幸福があるかないか解らぬとすることは科学的に証明されておるは全く愚かなことであるのです。故にこれを行えば必ず善い結果があるということが科学的に証明されておることを行うので、はじめてその道德実行に熱心も加わってきて、成功もするし幸福にもなるのです。」(『論文』

①五九ページ、同様の趣旨のことは①九二〜九三ページにも見えてくる)。

広池千九郎によれば、まず人類の生存・発達・安心・平和・幸福、つまり人間の救い及び進化という「価値次元」があり、その価値を実現していく根底に「宇宙自然の法則」という「法則次元」が存在するのである。最高道德における人間の精神の開発と救済は、まさに幸福という「価値」を目指し、人間を支配する「法則」に則り、

両者を通じて包括的な「意味体系」（意味のコスモス）を実現していく究極の活動である。またそれによって、新しい人格的生命を基礎とした社会、すなわち共同体（ゲマインシャフト）を創出する活動でもある。

このような価値と法則との統合という観点から見ると、最高道徳は次の三つの過程から成り立っていることになる。

第一は、「価値理想論」である。最高道徳は、聖人が開示した人間にとっての価値理想に範を見出だす生き方であり、聖人の道徳を理想とする。理想価値は、いうまでもなく幸福観であるが、広池に特徴的なことは「品性完成」の価値に着眼していることである。

第二は、「価値実現論」である。これは、価値伝達論といってもよいが、実生活上、まことに興味深い構造を含んでいる。つまり、われわれは、最高道徳をみずから実行してある程度自己自身においてその価値を実現し、さらにそれを他者に伝達移植する。また、そのように伝達する活動を行うこと自体も理想価値の実現になる、という循環的な構造になっている。Aを他者に伝達することがまたAの実現・完成の中に含まれるという自己再帰的循環的構造があるのである。

第三は、「価値解釈論」である。これは道徳行為の結果、つまり自己にとっての結果と他者にとっての結果を、どのように受け止めるかであり、その受け止め方、意味解釈の仕方は価値実現としての最高道徳の完結であり完成である。これは、因果律の自覚とか、「運命の自覚」と呼ばれているものである。<sup>(3)</sup>

この価値実現行為の三つの段階を統合したものが、人心の開発救済の活動である。以下、人心の開発救済という視点から、最高道徳の全体構造を透視して、広池千九郎の提唱する道徳思想と道徳実行の意義を解明する。次節では、まず最高道徳が理想とし目的とする価値について見よう。

### 〈注〉

(1) 広池千九郎の著作からの引用文献は、以下の簡略表記に従う。また引用文は、原則として現代表記に変える。

『論文』——『道徳科学の論文』新版、広池学園出版部。

『選集』——『広池千九郎モラロジー選集』一―三巻、

広池学園出版部（現在絶版）。

(2) 『新約聖書』「ヨハネ伝」によれば、イエスは人々に、偽の予言者と本物の予言者とを見分けるようにと教えたとし、イエスが唯一のキリスト（救い主）と信すべきことを記している（ヨハネ第一、一・一六）。広池千九郎はそのような「宗教」の立場での限定を設けず、「聖人」という概念を採用する。「聖人」は元来多分に中国起源の概念で、カトリックには聖人、その他には聖者とて、現神、聖（ひじり）、上人（しようにん）といった観念がある。

広池はイエスも含めて本文に挙げた幾人かの「人類の教師」といえる古代の優れた人格者を、それぞれの個性は認識しつつも、人間救済への「道徳価値」の体現者（いわば救い主といえる存在）として、おなじように評価している。そして聖人の教えている価値理想こそが人間救済の理想であり、それを実現する原理方法が最高道徳と

されるのである。広池のいう「聖人」の資格条件を要約すると、次のとおりである（『論文』⑤第二章第三項を参照）。

一、一切自己の意見、主義、希望、欲望をもたず、「宇宙根本唯一の神」を信じ、その心の現れである「宇宙自然の法則」に従い、人類発達の原理を堅持する。

二、往々にして「天啓」を受けることがある。

三、「伝統」を尊重し、正しく祖述する。

四、一視同仁の「慈悲心」をもち、何如なることもすべて「自己に反省」する。

五、神の心を体得して「自己の品性を造る」ことを主とし、一切の利己的事業を企てない。

六、人為的に「主権を有する団体」を造らない。「人心の開発救済」と人類幸福増進のための最小限度の施設は許した。

七、必要な「礼儀礼節」を重んじ、一切の虚飾を用いない。

八、すべて「中庸」を尚ぶ。

九、自己の精神と行為の基礎をすべて神の精神に置き、その精神の精髓を他人に移植して「人心救済」を行う。

一〇、「世界平和と人類幸福」とを目的とし、一宗一派、一団体の保存発達を囿らず、その行動、施設ともに「普遍的性質」を持つ。  
これこそ、われわれ人類の進化の理想像とは言えないだ

ろうか。

(3) 救いへの道としての最高道徳は、広池自身も講義の中で述べているが、仏教のいわゆる四諦(苦集滅道)及び悟りへの道たる八聖道とも対比できる。この意味で、広池の最高道徳は、後述するように「罪の解脱」及び「苦の克服」という人間の救いの二大課題に取り組むのである。

## 二、価値理想論

### (一) 幸福観——究極価値

われわれ人間がみずからの生を貫いて求めてやまない包括的な「意味体系」の核心をなすものは、まず幸福論、救済論、すなわち幸せとは何か、救いとは何かという問いである。これは、宗教学の巨匠マックス・ヴェーバーの表現をかりれば「救済財」(Heilsgüter)に関する問いである。つまり「どこから」出発して、「どこへ」向けて救われるのかという問いである。これがわれわれにとっての価値理想論の主題である。もう一つの核心は、「いかにすれば」救われるかという方法の問題であるが、それは価値実現論の主題なので、次節において光を当てよう。

世の中には、目的とする色々な理想価値の観念が考えられている。すなわち真・善・美・聖といった価値、あるいは生命・自由・幸福追及(日本国憲法)、また創造価値・体験価値・態度価値(フランクフル)、豊かさ、正義、愛、生きがい、自己実現、悟り、見性、解脱、ねはん、永遠の生命、梵我一如、大我との一体化などが見出ださ

れる。

広池千九郎の最高道徳では、何をもちて人間の救い、人間の幸福と考えているであろうか。広池は価値の理想——救いの理想——に二つの次元を考えている。一方は「幸福」、他方は「品性完成」といわれるものである。

ただし、ここに重大な注意点がある。幸福というものはわれわれにとって究極的で自足的な目的であり、アリストテレスの言葉をかりると「他のすべてのものがそれへの手段であるような価値」であるが、しかし広池によると、幸福は「間接的」にしか実現されない目的といわれていることである。他方、品性完成は幸福そのものではなく、幸福に至る基礎であり方法であるが、日々の生活の中での実際の道徳実行においては「直接的」な目的と見なされているのである。広池によると、「品性」(character)は人間の持つ様々な力の内の特別な力であり、幸福を実現するための基礎、根拠力として働くものである。幸福は、直接にそれを実現しようとしても不可能であり、まずこの「品性」という根本力を増殖することが先決であるとされている。この点のちに「目的的手段」及び「手段の目的化」の問題として検討しよう。

さて、まず人間の幸福についての見方を取り上げよう。最高道徳の究極目的は、人類の生存・発達・安心・平和・幸福の実現にあるといわれる。

「われわれ文明人の不断の活動の目的は、みな幸福を実現しようとするにあるのです。……幸福の実質は自己の健康・長命・開運及び自己の子孫の永久的繁栄にあるのです。」(『論文』①九〇ページ)

これは、人間の幸福の全体的な意味付けを述べたものであるが、幸福は、次のように個人レベルと集団レベルの双方を持っていると考えられている。

一、個人——健康・長命・開運・子孫繁栄(家族の万世一系・万世不朽)

二、団体——創業から守成へ、統一と秩序、平和、永續發展（国家、学校、企業、教団その他の団体、さらに国際的団体、全人類世界などにわたる）

このように個人的、団体的、世界的幸福が一体となって、人間の心に真の安心立命、黄金世界が実現できるといのである。

ところで、一般に幸福論には二つの問題がある。すなわち①苦とそれからの解脱の問題、②罪とそれからの解脱の問題、である。そしてこの両者をどのように関連づけるかによって、色々な幸福論が成り立つ。すなわち「苦の原因は自己の負う罪にある」とする因果応報論、苦には意味があるという苦難の神義論、さらに、「神は愛である」あるいは「宇宙の働きは慈悲である」という愛・慈悲の神義論などである。広池の示す幸福の觀念にも、まず苦（苦難）の解脱という意味がある。他方の「罪の解脱」は「品性完成論」の課題である。それは次の節で検討しよう。

広池の幸福論においては、幾つかの際立った論点がある。

第一は、「精神的幸福感」の強調である。それは心の中の主観的な「安心（立命）」とか「平和」、あるいは賑やか、よろこび、自由、心の中の「黄金世界」といった言葉で語られるが、それは周囲の事情のいかんにかかわらず、道徳実行者が実行に比例して、直ちに自己の心の中に得られるものである。最高道徳の救いの核心は、まず心を純化することであって、「純精神的」なのである。

すべての幸福論には、心の内面の「価値意識」と、客体としての「価値対象」との間にどのような関係があるかという問題がある。幸福とはなによりも心の内なる幸福感であり内面の価値感である。つまり健康とか、長命、開運、子孫繁栄、団体の發展、世界平和などは価値対象で、これらの事柄に安心とか、喜び、幸福の感情を持つ

のは、見るものの主観、内面の価値判断によるのである。しかし第二に、幸福は単なる気分や感じの問題ではない。つまり究極的・長期的な目標として「万世一系」「万世不朽」という実質価値が目指され、それが「安心立命」の究極的基礎と見られているのである（『論文』①二七ページ）。「安心立命」の問題については、最後の節で再び言及するが、今のこの万世一系もしくは不朽という価値は子孫繁栄（肉体的および精神的子孫の繁栄）に関する究極的願望であり、広池において救いの最後の、究極的な価値基準である。

万世一系は、最高道徳論の中心的な理想価値であって、道徳実行の効果を判断し実証する因果律論の価値的根拠である。その実例として広池の念頭にあるのは日本の皇室、中国の孔子の家系、その他世界各地に存在する永続家系である。それゆえ、この面から見れば、広池の説く人間の幸福は「現世的」な性質のものである。広池は、現世における善悪の報酬は差し引きが済まないとして「未来死後の賞罰」に期するのでは、「道徳が世に普及せぬ遺憾があるのです」と述べている（『論文』①二五―二六ページ）。

ところが第三に、幸福論には靈魂（たましい）の救いの問題が含まれる。人類の救いを論ずるに「魂の救い」の問題を無視しては、人類の深い欲求に応じられないだろう。人間は永遠の生命を求め、現世の自分の人生を超える永遠幸福である。すなわち、自己の魂の永世と幸せ（永遠の生命）、「現世」においては、自己の子孫の永久的繁栄、団体的には団体の平和と永続發展である。しかも、子孫繁栄というものは、肉体的生を超えて永世するはずの魂があつてはじめて、見ることができて、喜びの源泉となりうるから、現世的であるとともに彼岸的な価値なのである。

この点、実は広池は「靈魂不滅説」に立っていて、次のように述べている（『論文』④六二―六三ページ以下、「選集」第

三巻に収められている『神壇説明書』などを参照。

「とこしべに我がたましひは茲に生きて

御教え守る人々の生れ更わるを折り申さむ

モラロジの父」

これは広池千九郎の辞世の句（昭和一三年）であるが、広池の人間救済観の「秘密」が表明されているといえる。広池は、釈迦の救済活動にふれながら「阿弥陀如来」の姿に自分を擬していると思われるが、これは彼岸的救済観であり、極めて注目されるところであるので、後に救済の方法論を見る「価値実現論」の箇所において再説しよう。

人間の救いは、靈魂の次元まで含めて見るか見ないかによって、その内容が根本的に異なったものとなるが、その点、広池は「彼岸と此岸」、「聖と俗」との統一を目指したといえる。

さらに以上を総合する第四の論点として、人間の幸福・救済の根底に、より広大な宇宙論、天地自然観が存在し、「万有の平均と調和」という宇宙論的・エコロジ的な価値論・意味論がある。すなわち、最高道徳の目的は、人間各自に「万有相互間の平均」と「万有内部の平均」（『選集』第一巻四六三ページ）、つまり万有が比例的に平均し調和した状態の実現に向かって各自努めさせ、それぞれの心に平均調和をもたらし安心・平和・幸福を生み出すのである（『論文』①第二版自序文三―四ページ）。

宇宙論は、自己の運命の自覚の仕方を左右する。宇宙論は、幸福と品性完成という人間的な人生の価値目的を、さらにより高い「宇宙的価値」に統合するものである。これはいわば「宇宙的に考える」態度である。人間の心は、自己の存在や価値観をそれを越えるより包括的でより全体的な体系の中に位置付けて見ることによって「安心」し満足するものである。自己の当面の目的をより大いなる目的への方途、手段、階梯として位置づけるのである。これを「目的の手段化」というが、そのことによって人生全体をいっそう意味深くし、それを基礎として導き出される生きかたに向けて、人々をより高く深く強く動機づけることになるのである。またここから国家論、企業・学校その他の団体論などの見方が変わり、人間社会の新たな見方が出てくる。今まさに人類は、近代社会を超えるために、新たな宇宙論を必要としているのである。

## （二）品性完成と慈悲——根本価値

われわれは、自己の力を発揮し、自己の希望、自己の可能性を実現して生きたいと願う。それがかなえられるとき「幸福」と感ずる。しかしそのためには、まず真の自分というものを正しく知り、今の自分を超えていかねばならない。ここに、幸福論の基礎として品性論というものが据えられるゆえんがある。すなわち広池の最高道徳では、以上に述べた「幸福」という「究極価値」の前に、むしろ「品性」(character)というもうひとつの価値、つまり「根本価値」を重視する。そして根本価値である品性を向上させ完成させることが、道徳実行の直接の目的とされているのである。

では、「品性」とは何を意味するのか。現代では一般に品性という言葉は余り使われないが、広池の育った明治時代には今日よりも広く流布していて、サミュエル・スマイルズの『品性論』(Character)が邦訳され『西国立志編』として洛陽の紙価を高めた<sup>(3)</sup>。広池もこれを重視し引用している。ただし最高道徳の品性完成は、従来普通の道徳にいうところの品性完成とは異なる。従来の品性完成は、広池に言わせると「自利的に自己の精神および態度を高尙にし美化しようとする」程度にとどまる。



最高道德での品性完成とは、まず第一に、我々が先天的および後天的に犯してきた「シン」（神に対する罪）と「クライム」（社会に対する罪）とを解脱するという意味である（『論文』⑧一九〇ページ）。これは、前に指摘したように、罪へのとらわれからの解放すなわち「解脱」という救済観である。

また同時に、結局この罪というものと同じに帰するが、われわれ人間の心の内奥に染み込み心の全体を捉えている「自我」つまり煩惱、貧りといかりと痴（愚かさ）、もしくは「エゴイズム」に着眼し、品性完成とはその自我からの解放という意味での「自我没却」とも考えられている。そこに自由が得られるという。無知や囚われから脱すれば真の自己を発現できるというのである。

人間は誤った知にとらわれ、自己自身で生きていると誤解し、大いなるものの働き・恵みによって「生かされている」という事実には思い至らない（無知論）。それが人間の根源的な無知であり、ごう慢であり思い上がり（ヒュプリス）であり、人間の自己中心性であって、これが「自我」の本質である（叛神論）。つまり自己の存在の真の根拠を知らず、それと一体となっていないのである。知るとはそれと一体になることであり、その一体化が真の知恵であるのに、この根源への無知と背きにより、不安や苦惱が生まれ出ているのである。

だから人は、この意味での自我へのとらわれを知り、「悔い改め」ることにより、単に過去の罪によって失われた善を回復するのではなく、根本的に異なった種類の善を実現し、過去の罪に新しい意味を与えていくことができる。人生とは、しばしばたとえられるように、われわれが今書き続けている未完の本なのであり、すでに過去に書かれた部分の意味は、次に書かれる物事によって変わってくる。過去の罪や過失は、単に失われた善の回復であるだけではなく、新たな意味付けを与えられて、人間の生の不可欠の要素として活かされるのである。<sup>4)</sup>

第二に、品性完成とは、単に「何々からの解放」というにとどまるのではなく、自我からの解放は同時に積極的に新たな生へと向かって生き始めることである。すなわち広池によれば、品性の実質的内容は「慈悲心」であるといわれていて、それは色々な形容が与えられているが、神・聖人に近い人間にむかって進化向上することである。これはつまり、人間として究竟の理想は「神の本質」（慈悲）に同化することにある、という理想価値論であり、その模範は聖人の教説とその聖徳である（『選集』第三巻二六五ページ）。これは、「神は愛である」という考えと共通する（『聖書』ヨハネ第一、四・一六）。

では、最高品性の内実をなすその慈悲心とは、どのような心であろうか。それは、もっぱら以下のような標準によって起こる場合の精神作用に限るとされている。ここには目新しい概念が含まれるが、それは後に説明する。第一、神（本体）の存在を信ずる。すなわち、自我（無明、利己心、エゴイズム）を没却して、神の意志（心）の表現とされる宇宙自然の法則、つまり聖人の教説に表れた因果律を、最高理性と最高感情をもって判断し、確信する。因果律とは、自然の法則と人間の運命の法則である。神の法則つまり神の心は、万物を養育する精神である。ゆえに、人は宇宙自然の法則を遵守して、万物を養育するという義務の実行に努力する。

第二、「伝統」の原理を理解し、確信し、それに立脚して、伝統に対する報恩を実行する。右の自我没却とは結局は伝統に絶対服従し報恩することである。伝統報恩は、一方に直接的報恩として精神的・物質的に報恩することであり、他方、間接的報恩として人心開発救済に努力することにある。

第三、世界人心の開発もしくは救済の原理を理解し、確信し、かつ実行する。最高道德の完成は、この人心救済にある。いわく、

「人間が以上に列挙するところの最高道德における最も重要な原理を体得して、個人・団体もしくは他に對して、あるいはその幸福を図り、あるいはその完成を図る場合に起こるところの人間の精神作用がすなわち神

の授けられたるところの慈悲心であるのです。」(以上『論文』⑦七ページ以下、及び八八〜八九ページ)  
 広池のこのような品性完成論すなわち慈悲論は、人類世界の平和実現にとって、次のように極めて深い意図が秘められている。

広池の第一の意図は、神(本体)論のそれである。これは、最高道徳論の根源的、包括的根拠となるものであるが、神(本体)論は世界の神観念の統合、転換であり、それによる諸民族、諸文化の統合と共生を可能にする道を開拓することが意図されているのである。

広池は、神の存在や性質に関する古今東西の相争う煩わしい議論には深入りせずに、直ちに「聖人の教説」に従って、神の存在を認め、さらに神は色々な名称をもって想定されているが同一の絶対的存在つまり本体であり、それは結局大宇宙そのものであり、その心は万物を育てる慈悲にあると考える。神は宇宙であり宇宙は神である。神とは、仏その他名称は様々であれ、実体は「唯一絶対」であって、しかも宇宙・天地自然と同心同体である。そして人間というものは、その身体はこの永遠なる神・宇宙の分身であり、その心は神の心、全霊の分霊である」とされる(『論文』⑦二二〜二二二ページ以下参照)。

このように理解された宇宙・神観念は、その中に住む人間にとって究極的な意味の源泉であり、そこから人の一生も道徳実行も宇宙の意味を持つという見方が生まれる。自己の努力は「自己が宇宙を形成するところの一員として」宇宙の万物成育の事業を助けるのであると考える(『論文』⑦二〇ページ)。だから、目下人類の歴史段階では色々と文化、民族、宗教の信仰は異なっているけれども、最高道徳の神観念はそれらの現象界を包摂する全人類的で普遍的な「意味体系」を求めようとするものなのである。聖人の教えと科学との出会いは、それを示すものにほかならない。

広池は、今後の人類世界においては、いずれか特定の宗教が全部を支配するということは不可能であると述べている。確かに今後の人類にとっての普遍的、最大公約数的な価値理想は、すべての高等宗教と真正な科学との統合という広池の目指す地平の他にはありえないであろう。一方に、人類の高等文明の価値的源流たる世界諸聖人の教えが価値の高みを指し示し、他方に発達途上であってなお不十分ではあるにせよ、人類の客観的・普遍的な知的営為としての現代科学が——それに併せて歴史の事実も参照していくならば——民族や文化の限界に縛られないで、人類知の実証的・客観的で普遍的な性質を確保するであろうからである(『論文』⑦二四八ページ)。

このような立場での道徳実行の態度を、広池は信仰なき道徳でもなく、道徳なき信仰でもなく、「真の信仰に基づいて道徳的生活をなすもの」と述べている(『論文』⑦二四二ページ)。広池は、人類の歴史をかえりみるとき、東洋のほうに初め神観念を有して先に発展していたが、やがてそれを失って西洋に遅れをとり、西洋が神観念をしっかりと持つことにより世界史を導いてきたと述べている(『論文』⑦二五七ページ)。

広池の第二の意図は、「伝統の原理」のそれである。これは広池の最高道徳論に独特なものであり、本質的な柱であって、世界諸聖人の教えにしたがって、神・宇宙に由来し人間界の秩序とその生成化育の作用を構成する主要系列(人類共通の恩人という)に着眼するものである。

すなわち人間界には、すべて神・宇宙から発するところの、①血縁的・家族的、②社会・国家的、及び③精神的、という主要な生命系統が存在し生きて働いていることを確認し、その系列を「伝統」と名付けるのである。それぞれは、「家の伝統」(家庭生活の系列たる親、祖先)、「国の伝統」(国家生活の中心系列たる主権者、元首、象徴、政治価値的正統)、「精神伝統」(精神生活の系列たる宗教の開祖、思想・道徳・教育の祖及び正統)、「さらにそれに準ずる伝統(職場やその他での恩人)であるとされる。

これは人間社会の構成についての統合的な見方であり、生命論、文化論、歴史論を含む新理論といえる。これは「伝統のシステム」と呼べるものである。広池のいう「伝統のシステム」は、神の原理で示された神的秩序が人間社会に現れたものと考えられており、生命的、精神的な構成体としての人間共同体の原理であって、生命的・精神的な生成化育の秩序作用を表現しているから、それを受けて実行すれば、その人及びその団体は力強い生命力を持続的に発揮することになる。先に見た万世不朽という価値理想は、この伝統の働きを祖述する——継承し発展させる——ことよってのみ実現される。ゆえに「伝統」は「人間の精神的及び物質的生活の根元」であって、その根元と離れずに進む者は「ついに最後の幸福に到達するのであります」と断言されている（『論文』⑦三八二、四二二ページ）。

以上のような背景を基礎として広池のいう「慈悲」は、苦しみを抜き楽しみを与えるといった程度にとどまらず、壮大な人間進化論、文明・文化論の意図を込めたものであり、それゆえ普遍的な広がりを持つ。

広池はまた、慈悲が具体的に現されるときの姿について、次の一〇項目を示している（『選集』第一卷一八七ページ以下）。

- 一、すべて人間を愛する事を目的とし、金銭・物品・事業（営利のみでなく、教育、政治、芸術その他、すべての方面の事業）を次とし、一切を人間に役立てるように活用する。
- 二、公平に且つ普遍的に人を愛する。
- 三、有終の美を尊び、親心で人を育て上げる。
- 四、自分の苦勞の成果を人に分かち与える。
- 五、事業、利益、名誉を独占しない。

六、慈悲は建設的で、秩序、安心、平和を目的にした精神作用と行為を保持する。

七、理性と感情との調和に立ち、深い思い遣りの心を持つ。

八、神、伝統、準伝統の恩に感謝し報恩する。

九、いついかなる人にも、変わりなく思い遣りの心を発し、また道理に固執しない。

一〇、他人に対し心に安心を与え、人心の開発救済に心がける。

最高道徳という慈悲とは、結局、各自宇宙の一員として神の慈悲に感動しかつ感謝して懸命に生き、「人類及び万有に對する神の平等愛に到達するにある」のである（『論文』⑦一一九ページ）。

以上が最高道徳にいう「慈悲」であり、品性の内実であって、幸福実現のための根本価値となる。ゆえに、広池千九郎においては、品性とは大宇宙・天地自然の、つまり神仏の、「大いなる生成化育の働きが人間に受け止められ、体得され、心身に蓄えられ、実現されたもの」と見られていたといえる。つまり品性とは、天地の創造化育の働きが人間に通ってきて体得され蓄えられ、現れてくるものである。また品性は、神の恵みであり働きであり、神の力、仏の力などと呼ばれるものが人間に表れたものともいえる。

それゆえに広池は孟子をうけて「天爵修めて人爵これに従う」という。天爵とは、天から授かる位であり、人爵つまり人間社会から授けられる爵位ではない。天爵は、人間が天の命を受け天の理にしたがって与えられる特別の資格であり、人間にとっての根本価値・根本力となるものである。

結局、品性とは、神・聖人に由来する最高理性と最高感情と最高知識との統合されたものであり、その意味で「知徳一体」（神の心・聖人の慈悲を含む知とそれにもとづく生き方）となった人間の性質なのである。具体的には、後に「真に救済された人」の項で見ることにしよう。

- (1) Max Weber, *Wirtschaft und Gesellschaft, Grundriss der Soziologie, fünfte, revidierte Auflage, besorgt von Johannes Winckelmann, 1972.* 武藤一雄・藪田宗人・藪田坦共訳『宗教社会学』創文社、一九七六年、一八九ページ以下。
- (2) 幸福というプラス価値に対するマイナス価値としての苦痛、不満・不和、苦悩、不安などの位置付けは、古来の仏教や、現代心理学におけるマズローの欲求段階説などからも考えられる。なお、大須賀潔『実存と信仰』大明堂、一七一ページ以下を参照。
- (3) 欧米における「品性」(character)という言葉の由来については、たとえばEncyclopedia of Religion and Ethics, ed. by James Hastings, Vol.3, T. and T. Clark, pp. 364-65. 歴史をひもとくならば元来「品性」(character)とは、古代ギリシャでは貨幣などの刻印またはその
- 刻印を作る道具を意味した。ヨーロッパ中世にはキリスト教の影響により神的(spirital)な存在が人間に表れたものを意味した。近代になりカントがcharacterという語を重視し「道徳的品性」について論じたが、その場合に道徳的品性とは自分の意志で、普遍的と考える道徳的基準を自分に課し、それを基準にして生きていくという性質を指す。したがって、普遍的基準に基づいて行為する自律的人間の特質が「品性」なのであった。なお、漢字圏では品と性とを結び付けた熟語としての品性の用法はさほど古くにさかのばれない。
- (4) 人生を一冊の本にたとえ、悪や罪の問題を救いとかかわらせて意味付けるのは、人間意志の自由論の問題でもあるが、本来キリスト教における「神義論」の問題への一つの解釈である。この点、F. ベレス『悪の形而上学』創文社、一九八一年、一九二―一九五ページの説を参照。

### 三、価値実現論

#### (一) 価値実現の順序

最高道徳は、「どこからどこへ」という救いの到達点を示す価値理想論であるが、また同時に「いかにして」という価値実現論すなわち幸福を実現する方法論であり、救いの方法論でもある。それが品性完成論であり、その極致が人心の開発救済論すなわち人間の精神の「立て替え」(更生、改心 conversion)の方法原理なのである。ここには極めて興味深い論理が秘められている。

救いの方法論に関しての広池千九郎による第一の決定的に重要な指摘は、先にもふれたように道徳実行の動機・目的というものの性質である。幸福というものは各自なりに判断した「善行」によってそれを直接に目指しても、実現不可能だというにある(『論文』⑦四、六、一一八、一二八ページ)。つまり広池は、道徳の実行は「消極的」な動機・目的に立脚すべきであるとする。すなわち、最高道徳の実行の基礎は、もちろん「自己の保存」にあるけれども、実行の動機目的は「自己の過去における過失及び罪悪の解脱」にあり、自己の道徳生活は全く自己の過去における贖罪のために働く、という「聖人の教え」に基づくべきものであるとされる。いわく、

「最高道徳においては、直接に自己の健康・長命・開運・名誉もしくは利益の獲得を目的として行動するのでなく、その獲得は自己の品性成就の後、間接に來たるところの自然の結果とするが故に、最高道徳はその実行の動機及び目的が従来の普通道徳のごとくに利己的でないであります。」(『論文』⑦五ページ)

「おのずからその実行者の心安らかにして、その行動平和であり、したがってその結果、いかなる場合にも、他人と衝突するようなことはないであります。」(『論文』⑦六ページ、同じ趣旨は⑧一九〇ページ)

これは「目的の間接化」であり、現代一般に流行している安易な自己実現論への警告である。幸福の実質である健康・長命・開運・子孫繁栄は直接目指さず、それは間接の目的として先に延ばし、直接の目的としては品性完成というものを目指すわけである。

第二に、道徳実行の全根底には、後述するような「純粹他力」の考え（『論文』④一七ページ以下）、すなわち「われこれを為すにあらずして、ただこれに服するのみ」という精神があり、さらに「道徳実行を神にささげるといふ心」が存在する（『論文』⑦二〇ページ）。神の恵みに対する応答として、自我を取り去り自己の心を空にして、自己の一切を神への供え物として差し出し、神の働きの通路になればよい。そこにおのずから神の働きが自己を通じて現れる。これが真の自己実現である。人間は神の分身であり分霊であって偉大な力を秘めているのに、自我・エゴイズムによってそれを覆い隠し抑圧し發揮させないでいるのである。

広池はまた、「させていたたく」という態度と、「忠誠努力して要求せず」という精神態度とがともに肝要であることにも注意を促している。このように考えて努力すれば、道徳実行の効果は要求せずとも自然に神から授かるという。この自然の精神は、動機の段階のみでなく実行の過程、結果についての意味解釈など、実行のすべての局面で一貫する。これは、イエスが「明日の事を思い患うことはない、野の鳥を見なさい、神の恵みはさづけられているのです」と教えたところに通じるだろう。

そうして第三に、最高道徳では、まず自己の精神を神の心に一致するように改め、自己が健康、長命を得て幾分でも開運していく。その結果、そこに「一つの新たな感謝生活」が始まる。そこで各人は、その感謝生活の表現として、以下のように考えて新たな歩みを始めるとされる。

「自分の今日までの生活は全く利己心に基づいておつたもの故、少しの安心も出来なかつた。しかるに今回、最高道徳を聴くことを得て、真の安心と幸福とを精神的にも物質的にも享受するに至つたのは、これひとえに神の広大な慈悲心・諸聖人の教訓及び最高道徳を自分の精神内に扶植されたところの先輩のお陰である。されば、自分がこれまで種々なる無用のことに費やしていたところの物資もしくは努力をこの偉大なる人心救済の事業に捧げ、もつてその大恩を報じたし。」（『論文』⑧二〇一ページ）

これは、価値の伝達、つまり他者の心の開発救済への動機付けである。広池は「神本体の慈悲に感激する精神作用」が道徳実行の原動力であるとも述べている（『論文』旧版⑥一八〇四ページ）。これは、神とその精神を受け継ぐ諸伝統の恵みに感謝しつつ、心に喜びをいだけて歩み始めることである。自分が愛されていることを知るとともに、隣人の幸せのために愛を捧げること気付くことであり、まさしく生き方における根本的な転回であり、「根本決断 *optio fundamentalis*」（バルンハルト・ヘーリング）であるといえよう。

結局、広池千九郎の最高道徳論では、「更生」（改心、コンヴァーシオン）という概念がしばしば使用される。その意味は「人間が動物の種族より真の人間に生まれ変わること」であり、「神意に合すること」である。つまり更生の根本原理は、「自分の天性、自分の性分（天性と同じ）、自分の嗜好、自分の癖等一切を改めて天地の法則（神の心）に合するようにすること」、「人間固有の利己的本能を神の性質たる慈悲至誠の上に立つ人心救済の精神に生まれ更らすること」であるとされる（『選集』第三卷三二一三ページ）。

こうした「回心」つまり心の向きの転換から始まって、現実の生での具体的な生き方として「道徳」が展開される。ゆえに最高道徳は、いわば従来の宗教の人間の側面と、さらに道徳的側面とについて、それぞれを革新したうえで、より高い次元において再統合し現実生活の中で実行していくものである。

### （二）人心開発と救済の意味

広池千九郎においては、人間の精神の救いについて、開発と救済との二段階が考えられている。両者の関係は以下のように述べられている（『論文』⑧一四八ページ）。

まず第一に「開発」(enlightenment)とは、従来一般に人間の本能から発達してきた学問、知識、道德を習得し述べ伝えて移植することを含むが、しかしそのみでは不十分であるから、さらに最高道德の習得と伝達を必要とする。

初めにふれたように、広池はなかでも「世界諸聖人の教説・教訓及び実行上に一貫せるところの学問・知識・思想・道德及び信仰上の原理」を「純粹正統の学問」と名付ける(『論文』⑧三ページ以下)。このような広池の主張には、現代世界の学問一般に対する強烈な批判が込められている。世の多くの学者が自分の感情や利己心から学説を立て、人々を誤り導いていることへの批判である。またそれは、ルネッサンス以来、近代の人間の覚醒である「啓蒙」(enlightenment)主義の自由・平等・博愛の水準を超えて、古聖人の知恵(ウイズダム、パンニャー)を再興しようとするものである。これは、神の精神は目に見えないが、それを顕している聖人の知恵を体得することにより、自他ともに新たな生命、永遠の生命を実現しようではないかという提案である。広池の「純粹正統の学問」は、人類の知の現状に対する憂慮であり、人類知、人類精神の改革、宗教、科学その他人間の精神活動のイノヴェーションへの真剣な提案なのである。これが広池の「知徳一体論」の核心なのである(『論文』②二五ページ以下)。

広池によれば、人間精神の本質的な開発とは、純粹正統の学問により「秩序的にその精神を知・情・意の各方面にわたって、根本的且つ普遍的に開発して、もって古聖人の理想とせしところの至誠且つ慈悲の精神を有する人」(『論文』⑧八ページ)を造り出すことである。ゆえにそれは、人類知の根本的革新を目指すものといえるのであり、そこから生き方の新生が可能になる。

結局、開発の枢要点をまとめると、順次左の三箇条となる。

- 一、最高道德的知識を習得する。
  - 二、その最高道德を実行する。
  - 三、徹底的な開発——神本体の存在すなわち因果律の存在を確信し、聖人と同じ慈悲至誠の心となり、伝統に事え、人心の開発もしくは救済に努力する。したがって、開発の極致は救済に一致することになる。
- では第二に、「救済」(salvation)の意味はどのように説明されているであろうか。それは、他者の精神への働きかけにある。いわく、

「最高道德における人心救済は、聖人の実行せられたいわゆる神の心に基づくところの知識及び道德を、まず自己自身に体得し且つ実行して、自己の祖先以来意識的もしくは無意識的に犯し来れるところのシンを解脱し、然る後に、その自己の精神及び行為を他人の精神に移植して、自他の精神を根本的に改善することでありませう。」(『論文』⑧一九二—一九三ページ)

すなわち、救済とは自他不二であり、それはまず「自己救済」であり自己の「精神の救い」であるが、同時にそれは「その生命ある実行の種子を他人の精神内に移植するのが、最高道德における人心救済の根本的方法」なのであるとされる(『論文』⑧二一六ページ)。

また、次のようにもいわれる。

「最高道德の実行とか、神に救済されたとかいうことは、これと同時にその人はすでに他人を開発しもしくは救済しつつあることを指すのであります」(『論文』⑧二一七ページ)。

「最高道德における人心救済は……他を救うというよりは自ら救われるのが主となるので、自分が救われたということは他人を救いかけたということになるのであります。」(『論文』⑧二一八ページ)

自己の救済が目的であつて他者の救済は「自己の救済さるるの方法」であると述べられているが、その自己が救われるとは他者の救済に自己を捧げ切ることに尽きる。それは、あたかも松明がひたすら他を照らして、その使命を終るようになる。

これは、神を愛し、自己を愛し、おなじように他人を愛するという隣人愛を、人間の「精神救済」という核心において徹底するものであり、菩薩行である。ゆえにこれは、諸人すべてが救いにあずかる道を示すものであり、人間存在の相互性に立ち、自己救済と他者救済とが不可分の循環的な関連構造においてあるという「大乘」的救済観の系譜の上に発展した生き方である。すなわち広池は、出家などいわゆる聖職者しか救われたいというのではなく、世俗においてもすべて改心した人は救われるという「一乘法」こそ究極であつて、まことの心にもとづく最高道徳の人心救済を行うならば誰でも必ず救われると説く（『選集』第三卷三〇二ページ以下）。

道徳実行は、いわゆる「往相」つまり自己が神仏により救いにあずかる道と、「還相」つまり他者の救いに向かう道との、弁証法的な同時的統合の過程としての「慈悲」の実行でもあり「隣人愛」の実行でもある。

### (三) 価値伝達の方法

さてそれでは、こうした意味を含む人心の開発救済の「実行方法」については、どのように述べられているか。その基本は、以下のようにまず正しい知識の研究開発、そしてそれに基づく教育と、さらに人格的感化による救済ということにある（『論文』⑧全体を参照）。

第一、モラロジーの研究——最高道徳及びこれに関連する諸学問の研究。これは、正しい知の研究開発である。すなわち、特に聖人の教えにしたがつて現代の学問の根本原理を改造し、さらに進んで人々の思想を改造することであり、広池はそれを「すこぶる必要であります」と強調するのである（『論文』⑧九〇ページ）。それゆえ聖人の研究を始めとして、様々な分野にわたる科学を含めた正統的な人類知の探求が不可欠である。そしてこのように真の知識に基づく「知徳一体」の達成が、開発というものの「第一原理」とされる。人間生活の一切は思考、知識、思想により方向づけられるから、正しい知識による精神の救いと方向づけは道徳実行の出発点なのである。第二、次に教育は知徳の伝達移植であり、正式の学校教育による。これが開発の「第二原理」といわれる。また、補助的に社会教育にもよる。

第三、個人的方法と集団的方法——団体的方法では人間の知的開発と思想善導までが可能であるのみで、徹底的な救済は個人的教育法による（『論文』⑧一九五ページ）。

第四、さらに、開発救済の実行順序については、次のように述べられている（『論文』⑧一九六―一九七ページ）。

- 一、自己の学問、経験その他種々の「知識」をもって相手方の「理性」を刺激し、相手方に最高道徳の原理を「理解」していただく。
- 二、自己の「慈悲及び至誠」の精神をもって相手方の「感情」を刺激して、相手方に最高道徳の原理への「感激」を呼びおこす。
- 三、自己の最高道徳の「実行談」を加えて相手方の「良心」に訴え、相手方の精神に最高道徳の「生命」を吹き込む。

第五、至誠に貫かれた感化の方法を重視する。いわく、

「真の最高道徳の実行者にして神に救済されたる人が、ある他の人に対し親しく卓を囲みて、徹底的に回を重

ね、諄々としてその人の心をその相手方の心に伝えて感化するのであります。」(『論文』⑧一九五ページ)

感化は、徳の伝達の問題である。すなわち、「主動者と被動者双方の徳が相合する場合において、最高道徳の種子は社会遺伝の法則に基づきて、漸次に社会の方面に繁殖するに至るのであります」と(『論文』⑧二一九ページ)。神の原理で述べたように、人間は神の分霊であり、開発、感化、救済は分霊と分霊との響き合いであり、応答である。感化は、マルチン・ブーバーの「対話的生」を徹底し、かかわりある人々が真に人格として交わることである。法や真理はそれを体得した人格を通じてのみ他の人格に伝わるものである。

以上に示された方法は、広池自身が実際に長い年月をかけて実行し確かめ証を得て来た方法の真髓を語っているものである。広池は、特に直接的な人格的感化の意義を強調し、単なる言葉、映画、弁舌、文字、書物、物品などでなく、みずからの心使いと実行とによる感化しか救済の実を挙げ得ないと教えているが、これは「徳のコミュニケーション」についての有効な方法原理であって、教育というもののあり方に対する重大な示唆であろう。

しかしさらに広池は、一步進んで、「救済の奥義」ともいえる根本的精神態度について開示している。すなわちそれは、「至誠神に通ず」ということであって、人心救済は人間の力のみでは不可能であり、神の力にすがらざるほかないこと、また神に祈り神に値を差し出し、犠牲を捧げるということであって、それゆえ次のように説かれる(以下『論文』⑧二六三―二六五ページ参照)。

「自分の心が十二分に救済されておりまして、ある自分以上の力が自分の力を掩護しておるといふごとくに自分の至誠心がなくては成功せぬように考えられます。」

「ただ人間の力のみではできぬもので、神に通ずる人間の至誠心でなければ成功せぬものと信じます。」

「故に、たとえば、ここにある一個人の心を救済するに当たりては、ある人格的対象(神)に向かって値を出

すのであります。たとえば「神よこの人を助けてください、その代償として私は今後好きな酒をやめて身を慎みます」とか、「神よこの人を助けてください、私は従来毎月人心救済のために二円ずつ出させていたいただいておりましたが、今月から四円ずつ出させていただきます」とかいうように願うのであります。これが人間の純粹なる誠の心というものです。」

そして、すでに言及した通り、最高道徳では「苦勞は自分がさせていただきまして、その結果から生ずる幸福はこれを他人に与えてください」と祈る(『論文』⑧二六五ページ)。広池は「自ら苦勞してこれを人に頒つ」という格言を遺している。神の働きと、恵みが自分に通ってくる、それを人々と分ち合うのである。すなわち広池は、「最高道徳の実行的原理は自ら苦勞してその結果を他人に頒つ(神)の精神と行為によりて表現せらる」とし、皇室の祭りの制度に言及して、それがひたすら国民の幸福を祈願すること(あり毫も陛下の私事に関する事項でないこと)を説明している。また親鸞の廻向文を引き、その意味は自己の救われることのみを祈願するのではなく、自己が菩提心を起こして一切衆生の救われることを願うにあると解説し、人々に注目を促してもいる(『論文』⑦一八六ページ以下)。

またここで広池千九郎は、実行上重大な意味を秘める点に注意を向けている。それは「精神伝統を経由して祈願すること」である。ただし最高道徳にいう祈願とは、たとえば直接、商売繁盛とか病氣回復祈願とかのよう(『選集』第三卷三〇三ページ以下)、こうして自己はひたすら空となり、神の精神につながる精神伝統を経由することが、神の恵みを伝えることになるのである。

実は広池は、先に「幸福観」の項で見たように、晩年、自分の心定めを阿弥陀如来に比していたと思われるの



である。広池は『無量寿經』における大乘浄土門では、法蔵比丘が修業して法蔵菩薩となり、ついで衆生済度の願を起し千辛万苦の後それを完成して阿弥陀如来となり、衆生がこれにむかつて一心信願すればこれを助けると説かれていることを紹介している。そして、これは釈迦その人の人心救済の記事であると信じていることができるとして、さらに次のように述べている。

「そもそもモラロジーにては、……古聖人の真伝統を襲ぎてその古聖人と同じ資格を具せる大人格者にありては、『生きたる間神に代わりてこの現実世界に至誠の人を造り出し、死したる後には右の至誠の人々の祈願を聴き入れてこれを神様に御紹介申し上げその祈願を成就せしむ』という信仰を肯定するのであります。」(『選集』第三卷、三〇四―三〇五ページ)

もちろん、祈願成就はだれにでも可能というわけではない。最高道徳実行に勤しむ至誠の人でなければその祈願は届かないとされている。イエスは人々に悔い改めることの必要性を語ったが、広池は最高道徳の実行に励む至誠の必要を説く。しかし、すべての人がその方向に心を向ける可能性をもつのであるから、この救いへの門は、古来いわれるように狭き門ではなく、だれであれ道徳実行の意志のある人にとっては広き門である。また、すでに第二節において、広池千九郎の示す救いの観念と靈魂不滅説に関してあらかじめ言及しておいたが、右は人間の救いに関する広池自身の究極の精神の告白である。われわれもまたこれを見習うことができよう。

〈注〉

(1) V・フランクは、いわゆる安易な自己実現論に厳しい批判を加えている。「自己実現とは結果の問題であつて、意向の対象とはなりえない。」(高島・長沢訳『現代人の病』紀伊国屋書店、一九七二年、五八ページ) 科学

的に見て当然のことであるが、結果を直接得ようとしな  
いで、ひたすらそのための原因を造り条件を充たすこと  
がよい結果を得ることにつながる。  
(2) 宗教的人間の一般的特質については、小口偉一編『宗教学』弘文堂、一九八一年、一三二―一三六ページを参照。

四、価値解釈論

(一) 真に救済された人とは

最高道徳は、人間としての最高の理想価値を実現しようとするものであり、それはまず直接的には「品性完成」を目指すものである。広池千九郎は品性完成すなわち理想価値の実現された姿について、「救済された人の主要特徴」を述べている(『論文』⑧二二二―二二三、二二五ページ以下)。

人間が「救われた」ということは、最高道徳の全部が実行できている状態、「全人格の変化」つまり「改心」であるといわれるが、それは自我を没却して、神・聖人の心に基づく最高道徳的知識と最高道徳心をもって自己の精神を改造し、すでに第二節に見た「慈悲」を構成する最高道徳の諸原理を実行している様をいう。広池は「真に救われた人」の精神作用と行動につき、日々の生活の場での教訓、注意点、指針も含めて詳しい描写を加えているので、その要点をまとめてみよう。

まず広池は、救済された人の人格の様は、「深き淵のごときもの」であると、次のように語っている。いわく、「一種いふべからざる神聖の気が秘められておるように見ゆるのであります。しこうしてその淵に臨む人が一種の靈感を受けたような思いを至るにであります。それゆえに、その真に救済された人に接触する人々は自然にその救済された人に引き付けられてきて、すべて利己心をもって充たされるところの凡俗の人と

いえども、最高道徳の心に化せらるるに至るのであります。〔論文〕⑧二二七―八ページ）  
これは、神の心である「一視同仁」の精神、慈悲寛大にして一切を自己に反省するという精神となり、すべての人に対してひたすらその人が救済されるようにと願うのみで、その他自分を良く思ってもらおうなどの自利の心がまったくない状態である。

さらに、以下の項目があげられている（『論文』⑧二三四ページ以下）。

イ、最高道徳を標準として自己を律して正しい道を歩き、他人を見るにもその標準による。

ロ、すべて事に当たって政策、虚偽、威嚇、破壊ということがない。

ハ、自己の社員を救済し幸福になることのみを心がける。

ニ、常に親心をもち、表裏のない心を持つ。

ホ、自己の行動を直接の関係者に知らせておき安心を与える。

ヘ、他人の過失、欠点、不正をあげつらい、不平を抱くことがない。

ト、精神伝統を救いの親と思う深い念が起り、他人を救済したいという心を持つ。

チ、いかなることがあっても自己に反省をして、感謝生活をする。また黙秘の徳を持つ。

リ、慈悲心と確実円満な常識が発達している。

ヌ、いったん緩急あれば、伝統のためにいかなる犠牲も払う。

ル、上下すべての人に真の親心を持ち、育てる精神を持つ。

以上の描写は、品性完成に向かう過程にある人の姿であるともいえるが、また同時に、一意専心そのように努力を続けること自体が最高価値を実現している状態でもあるわけであって、ここには救いの無限遠点を目指す循

環的な意味構造が存在するのである。「救済された人」とは、「品性完成した人」であるが、同時に日に孜孜としてたえず限りなく高みに向けて「品性完成に努力しつつある人」であり、したがってまた「人心開発に努力しつつある人」のこともある。「救済される」とは静止的でなく動的な姿なのである。救いは何処かに行き着くことではない。日々、行（ぎょう）じて行くことの内こそ、前進すること自体の内こそ、完成の姿がある。

広池は、こうしてひたすら品性完成に進めば、その結果求めずして自ずから幸福の実質が整うと述べている。したがって「人心」の救済を経て心の安心、充実、よろこびだけでなく、個人個人の心身の健康・向上と、またその人をめぐる社会的関係の発展とを含め、丸ごとの「人間」の救済の実現へと至るとされる。「至誠に基づく人心救済の行為は自然の大法則（神の心）に一致するがゆえに、その効力は万能にして……すべて人間の運命に向かつて好結果を持ち来たすものであります」といわれる（『論文』⑧二六九―七〇ページ）。

人間の「心の救済」は、その自然の結果として、はじめに述べた「価値理想」としての「人間の救済」を実現する。つまり個人においては、安心という精神的結果と、健康・長命・開運・子孫繁栄、さらに靈魂不滅と永遠の生命を与える。しかし同時に個人を超えて、国家やその他の団体、家の万世不朽という幸福の実質を実現する。この両者が合して、すなわち人類の生存、発達、安心、平和、幸福を実現することになるとせられるのである。もちろんここには、事物本然の姿を完成する自然の法則を根底とし、最高道徳の精神に基づいて自然界のエコロジーの循環の法則を確立し、それを踏みにじるような文明の欠陥を克服し、また人間性を損なう知識・物質・制度について改善していくが含まれる。

最高道徳は人間の精神の改善を主眼とするが、その精神とは人間と自然との関係、物質的・精神的な生活の全体のある方、政治、経済、技術、家庭、企業、学校、国家、国際関係へといたるすべての部門について改善する

ような広い視野と深い洞察、高い価値を備えた精神でなければならぬ。その意味で、最高道德の成果は新文明・新文化の開発と創造につながるものである。

## (二) 価値実現と人間的意味の完成

最高道德においては、道德実行から生まれる具体的な結果を精神的にどのように受け止めるかという、「意味解釈の問題」がある。それゆえ最後に、道德実行と意味解釈の問題について広池千九郎の説くところを、まとめてみよう。人心つまり人間の精神が開発され救われるということは、すでに述べたように、絶対的に因果律の存在（いいかえると神の働きの存在）に信頼することから出発し、また道德実行を通して因果律の徹底的な確信に到達することである。これまでも繰り返し言及してきたように、広池はそのことを、「安心立命」すなわち「深く天道を信じて安心立命す」という境地、また「天命にしたがって人事を尽くす」ところの「菩薩の修業」、そして「黄金世界の實現」について、懇切に説き明かしている。最後にこの点をまとめてみよう。

第一は、「科学的安心立命」ということである。すなわち「最高道德は科学の原理に依拠し、且つ一方これを超越せる聖人の教訓に基づきて実行をなし、もって漸次にその徳を積んで進むものであります」といい、こうした確実なる因果律の確信の基礎の上に立って安心立命することを「科学的安心立命」と名付けている（『論文』⑧三九三―三九四ページ）。これは、運命の自覚の合理的基礎を述べるものである。

第二には、自己の身分や身体に非常の困難が起きた場合の「唯心的安心立命」ということである。いわく、「最高道德においては、かかる場合に当たっては、その人各自に自己の運命を回想し、深く自己に反省し、神に対し人間社会に対して、自己のなすべき義務を忘れ、且つ自己の踐むべき道を踐まず、ついにかかる運命を

招きしことを神に向かって懺悔するのであります。しこうしてこの過去における過失及び罪惡に対してこれを贖わんがために、全く一身を生きながら神及び人間社会の前に犠牲として供するのであります。かくてこれのために、たとい土を食ひ、水を飲んでも、専心世界人心の開発もしくは救済をなすということを神に向かって誓うのであります。」（『論文』⑧四二八―二九ページ）

ここには、単なる宿命論を超えた積極的、能動的な運命観が存在する。運命に出会うのは自由から出発したものであるとも言われるが、ここには神・宇宙の恵みとそれへの人間の応答と責任、自由の働きと結合した運命開拓の道が示されている。そしてこの根底には、われわれ人間は、いかに理性的、合理的な能力を持った動物であるとはいえ、不可避免的に運命的限界に直面するものである、という厳粛な人生の覚悟がある。

第三は、道德実行における「純粹他力」の精神である。すなわち最高道德では、「もっぱら神を信じ、神の法則すなわち自然の法則を守り、その範囲内にて自力を用うる」のであり、その意味で「純粹の他力」である。しかし「これは神に信頼するのみの他力ではなく、自分の道德心にてその自然の法則以内立ち自己の慈悲及び至誠を発揮して努力する他力」である。いわばこれは、「仏の方よりいざなわれて」、もしくは「神の愛の力によりて」、実行へと努力することである。そこから結局、最高道德では、世間でいわれるような「人事を尽くして天命を待つ」のではなく、初めから「天命に従うて人事を尽くすのであります」ということになる。これは徹底的に純粹な他力の精神であり、ここから真に謙虚な心が生まれよう（『論文』⑧四一七―一七ページ以下）。

広池は、自分自身の来し方を振り返って次のように述懐している。

「私はまことに知・徳不足の者でありますから、常にその心身を諸聖人の教えの中に入れていただき、全くその教えを被り、身も心も聖人の心に同化させていただき、その教えのままに働かせていただいておりますのであ

ります。ゆえに小さきか今日を致したのであります。」(『論文』④四一八ページ)

今日多くの人は、神や超越者から自己を解放し、「主体性」、「セルフヘルプ」、「自我」の自覚や確立、あるいは近年のように「自己実現」(self-actualization)などと言いなながらも、実はその奥深くに自力を頼み、個人的にも集団的にもエゴイズムを秘めている。それが近代的人間観の結末ではないか。広池の観点は、そのような近代の「私の自覚に囚われた人間観」を超越し、新たな人間の確立への方向づけを我々に物語るものではないだろうか。

第四に、広池は「黄金世界」というものについて述べている。すなわち、最高道徳では、その実行者の心に黄金世界という限らない生命の喜びの境地が現れるというのである。

「個人の精神の中に神の心が宿って、その個人の精神が慈悲となり、平和となり、且つ人心の開発もしくは救済をなそうというような精神が出来ましたならば、すなわちその個人の精神内に黄金世界が現れたのでありましょう。」(以上『論文』④二五―二五二ページ)

このような人が家庭、地域社会、国家に増加するならば、それが黄金世界に近付きつつあることを意味するといわれる。道徳実行の「効果」は、実行する人の心の中に直接しかも速やかに現れる。

道徳実行の「効果」がいかに現れるかは、広池の道徳科学(モラロジー)にとって根本問題であったが、道徳実行においては、以上のようにその結果の受け止め方、すべての物事、自己の状態についての意味解釈のあり方が、精神の救済の究極的境地を左右するのである。

特にこの点注目すべきは、その実行の結果とは、一方において「行為の後に得られる結果」、つまり精神と身体の状態の改善とか、また財産や地位その他技術革新、豊かさなどの外的善の増加とかがもたらされるのみではなく、まずなによりも「行為そのもの」、つまりわれわれ自身自身の心の働きと体の働きそのものの内部過程に発生する

効果が存在するということである。すなわち、真心で人心救済を実行すれば、その実行の後に短期的、長期的に様々な良い成果を恵まれるが、一旦自分の罪滅ぼしと品性完成のために「させていただく」という心になれば、少しでもそのような心になった途端、いわば「大死一番」、その心になること自体の内に直接、即座に安らぎや喜びや希望がわきあがるのである。いわば、苦しみはなくなりますが、苦しみを苦しまなくなるのである。これは実行の「即自的効果」(consummatory effects)と呼ぶことができるだろう。

かくして、道徳実行の効果とは、瞬間瞬間においての喜びであり安心なのである。そしてまた、そのような瞬間の積み重ねである一生を通じての、さらにまた世代を越えた累代にわたっての、理想価値の実現であり進化であり完成である。それは瞬間と永遠との出会いを意味するといえよう。

## 五、人類の新文明建設への福音

道徳は意味を求めて生きる人間の活動の全体であり、したがって道徳は二つの次元の統合であると述べた。二つの次元とは価値と法則の次元である。この価値と法則を統合したものを、われわれは「意味体系」(意味のコスモス)と名付けた。以上にたどってきた広池千九郎の教説・実行の体系は、他ならぬこの「意味体系」の開拓、実現の方法を示しているのである。それゆえに、最高道徳の極致である人心開発救済は、個人においても団体においても、ともに人間の価値と可能性を開き、人類世界を進化発展させ、人類としての意味、使命を実現するための根本の道とされるのである。この道が解明され、その効果が証明が首尾よく成功し、人々に道徳実行の励ましになるならば、それは人類にとって無上の福音であるといえよう。

初めに述べたように、広池は文明的視野から、「一面には人間の文化は漸次に進歩した」ものの、「神的文化

たる最高道徳」が没却されて、その文化は今日ほとんど転覆に瀕し、「デモクラシー・社会主義・共産主義もしくは無政府主義など種々の思想」が案出されたけれども、人類はなお不幸に向かって陥りつつあると、時代の趨勢を展望したのであった（『論文』旧版⑥一八二五ページ）。それに対し、最高道徳こそが「時代の要求に伴う人類生活の至要原理なり」（『論文』⑦四六ページ）とし、「品性を完成し功徳を人類社会に樹立する究極の方法」（『論文』⑧一五二ページ）であると宣言する。

「今や人類の知識大いに進歩して何如なる高尚偉大なる教訓といえども人類が徹底的にこれを理解する能力を有する時代となっておりますから、私どもは聖人の人類に対する苦勞の意味を徹底的に理解して、単に聖人の心の偉大なる道徳に信賴するのみにとどまらず、神（本体）及び聖人の心を体得し且つ実行して、自己自ら人心救済の動機及び目的をもって、真の苦勞をなすようにならねばならぬのであります。これすなわち最高道徳の人類社会に起るに至った理由であります。」（『論文』旧版⑥一八一六―一八一七ページ）

これは、広池千九郎自身の抱負であるとともに、人間進化論を中心とする歴史論であって、あまねく世界人類に人間の究極的な精神的進化の可能性と方向性を告げる言葉である。この言葉にこそ広池千九郎の遙かなる悲願、壮大な希望が表明されている。

広池はいう、「精神の力は無限。一人のそれにて、よく巨万の人を左右す。体力はいかに強きも、多くの人には敵せず。」（『語録』一九五ページ）人類社会の進化を目指すとき、何処に着眼すべきであるかをこれは示している。その着眼点とは、物質等による一時的、限定的救済ではなく、それらすべての前提となる精神の根底的革新であり、改心であって、それこそが永久的、普遍的救済となるということである。

古來人類の歴史には二度の精神革命が現れ、人類は現在第三の精神革命期にさしかかっていると見られる。第

一、の精神革命とは、紀元前数世紀から紀元後数世紀にかけての時期、広池も注目するように古代聖人の出現であり、「高等宗教」（トインビー）の出現である。それにより人類は体系的な「救済知」つまり救い、幸福についての教えを中心とする体系的な意味のコスモスを得た。次に第二の精神革命とは、近代一五、一六世紀ごろから始まった科学革命と社会思想の革命である。人類はこれを通じて「作業知」つまり支配の知、物を造る知、科学技術の知を開発し、それによって自然界に働きかけ工業文明を發展させ、かつまた「人間主義」すなわちヒューマニズムを案出して近代市民社会を形成してきた。

今や現代の人類は第三の革命期に入りつつあって、以上の救済知と科学知とが新たな次元で統合されようとしている時代であると見られる。それは、人類の価値観と法則観とが次なるものに向かって一層發展することであり、一方に古代聖人の教知と生き方の再興を基礎とし、他方に現代最高の科学知を支えとする。ゆえに再び言うならば、それは人類の生存進化のための「意味体系」の復活新生（ルネッサンス）であり、また革新創造（イノベーション）なのである。広池千九郎の最高道徳の提唱は、壮大な人類の文明・文化の大道の前方に現れた「東方の光りの一つ」（新渡戸稲造博士）であり、荒野を進み行く我々に、希望とうるおいと喜び、平和、そしてとしへの生命のありかを教えるものである。